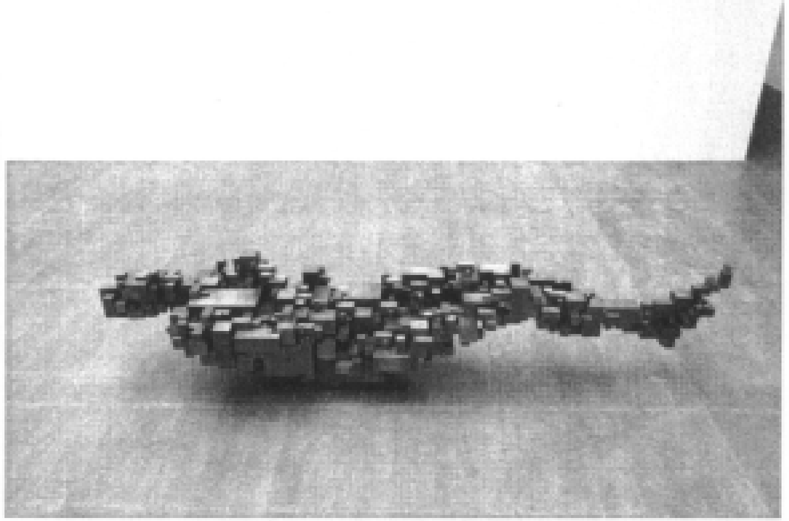
広河隆一「前日に3歳の子供を亡くしたアフガン難民母親」2001年

（写真はいずれも水戸芸術館現代美術センター提供）



アントニー・ゴームリー「位置決定／苦境」2004年（水戸芸術館現代美術センターでの展示風景　2006年）撮影・齋藤剛

「人間の未来へ　ダークサイドからの逃走」展

闇を知り希望紡ぐ

柴田　三吉

これまで私は、いくつかの場所で書き、話してきたことがある。それは、人にとっての「希望」とは、どこかに用意され、隠されてあるものではない、あるいは誰かが見せてくれたり、差し出してくれたりするものではないということである。

誰かが希望を語ったとしても、それはその人が育ててきたものであって、私のものではない。自分の希望は、自分自身の生から生み出していくほかないのである。それは世界を見る、聞く、さわる、読むということの中で、傷つきながら生み出していくものだ。

●○

水戸芸術館現代美術ギャラリーで行われている「人間の未来へ…」展は、いま書いたことを私に、あらためて思い起こさせてくれるものだった。有機物の体内をめぐるような展示作品に触れていくうち、私は擦過傷（さっかしょう）ではない深い傷を負ったからである。いや、世界の傷を経巡（へめぐ）るうちに、その傷と同化していったといった方が正確かもしれない。

たとえば、マイケル・ライト構成「100 SUNS」は、アメリカによる原水爆実験の、きのこ雲の写真を並べたものである。上空から撮られたもの、地上で撮られたものもあれば、爆心地のすぐ近く、人体実験として兵士たちが配置されているものもある。

つぎに橋本公の部屋に入ると、その響きは新たな恐怖へ転換される。壁に設置された世界地図のパネルには、一九四五年から九八年まで、米ソなど七か国によって行われた、二〇五三回の核実験が、時系列順に点滅する仕組みになっている。一カ月を一秒に短縮して示される光と電子音。目を閉じて椅子（いす）に座っていると、重なり合う音はまさに、ダークサイド（闇の側）からの音楽のようにも聞こえてくる。

以来人間は、地球を痛めつける暴力の下で暮らし、絶え間ない争い、殺りくを繰り返してきた。殺されるのは決まって弱い者、差別や貧困を押し付けられた人々だ。

闇に押しやられた人間たちに寄り添うように、ゴームリー、アバカノヴィッチ、オノ・ヨーコら造形作家は人体の苦悩を形象化し、ビル・ヴィオラ、広河隆一、長倉洋海ら映像作家は、人の皮膚ににじむ悲しみを写し取る。そのあいだに、谷川俊太郎、茨木のり子の、祈りに満ちた詩が置かれている。

●○

見ることは知ること、触れることは感じることだ。私たちの社会はいま、蔓延（まんえん）する暴力の影響を受けた「壊れ」をはらんでいるが、逆説的に言えば、表現者とはそうした世界に立ち会い、昆虫の触手のような手で傷に触れ、希望を紡いでいく者のことだろう。闇そのものを受け止める網を編んでいく者たち。

彼らの営みと私たちの営みは、美術館という小さな空間で仕切られてはいない。いつだって人の、回復への願いでつながっている。闇に浸した指を拭（ぬぐ）うことなく、それぞれの人間が自分の場所へ帰り、日々の暮らしをていねいに営んでいくならば、その場所にこそ、個々の希望が生まれてくるのだから。

しばた・さんきち＝詩人。1952年生まれ。93年、詩集『さかさの木』（壺井繁治賞、日本詩人クラブ新人賞受賞）。98年、詩集『わたしを調律する』（地球賞受賞）。ほかに、日本現代詩文庫『柴田三吉詩集』、韓国語版詩選集など

5月7日まで、水戸芸術館現代美術ギャラリー＝茨城県水戸市五軒町1の6の8
☎029（227）8120